

要 旨

本研究は、小学校国語科の書くことの学習において、経験の中から伝えたい思いを見つけて随筆を書くことのできる児童の育成を目指したものである。ウェブ図と書こうとする文章の主題文を作成し、グループで交流することによって、随筆を書くことに対する関心・意欲を高めるとともに、経験の中から伝えたい思いを見つけ、思いを深めたり考えを整理したりして、随筆を書くことができた。

キーワード：小学校 国語 書くこと 随筆 ウェブ図 主題文

I 主題設定の理由

随筆を書くことは、自分のものの見方や考え方を見つめる契機となる。随筆を書くためには、自分の考えを明確にした上で、そのきっかけとなった事実や経験について、想像したり推測したりして記述できるようにすることが大切となる。

本校で、文章を書くことを苦手とする児童は、書くことがないという思い込みから、書き出しでつまづくことが多い。その原因として、書くことがないのではなく、経験したことについて強い思いをもてずにいたり、潜在する思いを表出できずにいたりすることが考えられた。そこで、課題設定の段階で、複数の随筆を読み、それを参考に自分の経験や思いをウェブ図に表す学習活動や、ウェブ図を基に書いた主題文についてグループで交流する学習活動を設定することで、思いを深めたり、別の側面から見直したりすることができ、伝えたい思いを見つけて随筆を書くことのできる児童が育成できると考え、本主題を設定した。

II 研究目標

経験の中から伝えたい思いを見つけて随筆を書くことのできる児童を育成するために、次の手だてが有効であることを実践を通して明らかにする。

- ・複数の随筆を読み、筆者の伝えたい思いとその基になった事実や経験をワークシートに書き出す。
- ・ワークシートを参考にして、自分の経験や思いをウェブ図に表す。
- ・ウェブ図を基にして、経験や思いを一文で表した主題文を書き、グループで交流する。

III 研究仮説

書くことの学習において、次のような手だてを取り入れることにより、児童は経験の中から伝えたい思いを見つけて随筆を書くことができるであろう。

- ・複数の随筆を読み、筆者の伝えたい思いとその基になった事実や経験をワークシートに書き出す。
- ・ワークシートを参考にして、自分の経験や思いをウェブ図に表す。
- ・ウェブ図を基にして、経験や思いを一文で表した主題文を書き、グループで交流する。

IV 研究の実際とその考察

1 研究における基本的な考え方

文章を書くことに対する学習前の意識調査の結果では、39人中12人の児童が「嫌い」「どちらかという

と嫌い」と回答している。また、嫌いな理由として、「言葉が思い付かない」ということを挙げている児童は20人と半数以上にのぼる。文章を書くことに対する苦手意識を払拭するためには、経験を振り返って自分の伝えたい思いを明確にさせることが有効であると考えた。そこで、身近に起こったこと、見たことや聞いたこと、経験したことなどを他の人に分かるように描写した上で、感想や感慨、自分にとっての意味などをまとめたものである随筆を書く活動を通して、書きたいという思いをもたせることとした。

2 研究内容

(1) 複数の随筆を読む学習活動

一つの作品例だけから、随筆の書き方を理解するのは難しいと考えられる。そこで、複数の随筆を読み表現されている事実や伝えたいことを読み取らせ、筆者の考えについて感想を書かせることにした。三つの作品の中に出てくる題材や筆者の考え方から、自分の経験を想起したり、自分の文章に生かしたりできることを見つけれられるのではないかと考えたためである。ここでは、書き手の年齢、題材、ものの見方という観点から三つの随筆を選び、教材として使用した。

ア「見守られているということ（久田恭介）」第16回新聞配達に関するエッセーコンテスト最優秀作品

小学4年生の書き手が、鍵をなくして家に入れなかったとき、新聞配達のおばさんに毛布や食べ物をもって助けられたという事実を書いた作品である。知らず知らずのうちに、人に何かをしてもらった感謝の気持ちと呼び起こすのにより作品である。

イ「おしりみゃーらん（作者不詳）」（親子の日エッセイコンテスト2007入賞作品）

成人女性が書いた、親子三代に渡りおしりにくぼみがあるというエピソード。父親、書き手、娘の会話が楽しく、出来事や「つながっている」というキーワードが読み取りやすい。このキーワードから、家族や友達とのつながりについて思いを巡らせることができる作品である。

ウ「想像力（狩野萌子）」（三省堂平成23年度版国語教科書「小学生の国語」第6学年上）

小学6年生の書き手は、床においたポットを倒した失敗から、母に「想像力がなさ過ぎる」としかられ、想像することについていろいろ考える。そして、他の場面でも想像力を働かせて行動する必要があるという考えに至ることを書いている。自分の性格や生活の仕方を振り返るのに適した作品である。

(2) ウェブ図をかき学習活動

ウェブ図をかき広げていくうちに、事実ごと、又は思いごとに幾つかのかたまりができてくる。それらのかたまりの中から特に書きたいことを見つけることで、事実や思いが明確になり、伝えたい思いのはっきりした題材を見つけることができると考えた。

(3) 主題文を書く学習活動

複数ある題材の候補の中から、自分が本当に伝えたい思いを考えながら題材の一つを決める。そして主題を明確に自覚できるよう、書きたいことを一文で表した主題文を書く。

(4) 主題文について交流する学習活動

児童が書いた主題文の基になったウェブ図には、主題文が出来上がるまでの経緯が事実や思いとしてかかっている。書いた児童は、ウェブ図を提示しながら、自分の書いた主題文を紹介する。聞いている児童は、ウェブ図にかかれたことを読みながら、主題文に至った経緯を想像する。その際、事実から伝えたいことに至るまでに飛躍がないか、納得できる事実となっているかについて、質問したり、答えたりする。この交流を通して、よりよい主題文に変わったり、事実が付け加えられたり、新たな取材の必要性に気付いたりすることにつながると考えた。

3 検証方法

(1) アンケート

文章を書くことに対する関心・意欲を調べるために、単元の学習前と学習後に意識調査を行った。

設問1	文章を書くのは好きですか。（好き・どちらかという好き・どちらかというときらい・きらい）
設問2	設問1で答えた理由を箇条書きで書いてください。
設問3	文章を書く学習の好きなところ、きらいなところを書いてください。
設問4	先生に「原稿用紙2枚程度の文章を書きなさい」と言われたら、あなたはどんな題材や内容で書きますか。思いつくものをいくつでも書いてください。

(2) 授業感想

ウェブ図と主題文をかく活動や友達との交流により、児童が題材を見つけ、伝えたい思いを明確にできたかを調べるため、以下の五つの場面で授業感想を書かせた。

場 面	ね ら い
随筆を1編読んだ時点	随筆を書くということについての関心・意欲の変化を調べる。
随筆を3編読んだ時点	随筆を書くということについての関心・意欲の変化を調べる。
ウェブ図をかいた時点	見方や考え方が広がり、文章に書ける題材が見つかったかを調べる。
ウェブ図を基に主題文①を書いた時点	ウェブ図にかき込んだ言葉が、どのように主題文へと変化していったのかを調べる。
友達との交流後に主題文②を書いた時点	友達からのアドバイスが、伝えたい思いをはっきりさせたり、追加取材をしたりすることにつながっていたかを調べる。

(3) ワークシート

ウェブ図と主題文をかく活動や友達との交流による児童の変容を調べるため、ウェブ図、主題文①②をワークシートに書かせ、題材数と主題文の変容を分析した。

比 較	ね ら い
事前のアンケートで書かれた題材数と、ウェブ図上から見つけた題材数を比較する。	ウェブ図をかくことによって、文章として書く題材が新たに見つけられたかを調べる。
主題文①と主題文②について、出来事の実体性や思いの表現の仕方を比較する。	交流を経て、主題文がどのように変化したかを調べる。

4 検証授業について

単元名 随筆を書こう（全8時間）

時	学 習 活 動	検 証
事前	・アンケート	・意識調査 ・書きたい題材
1	・随筆についての基礎的な内容を知る。 ・随筆①を読み、筆者の経験した出来事と伝えたいことを書く。	・感想記述
2	・随筆②③を読み、筆者の経験した出来事と伝えたいことを書き出す。	・感想記述
3	・自分の経験や出来事と、それに対する自分の見方、感じ方、考え方をウェブ図に自由に書き出す。 ・ウェブ図を基に随筆の主題文①を書く。	・事前とウェブ図の題材数の比較 ・感想記述
4	・出来事と伝えたいこととのつながりを考えて、書いた主題文についてお互いに意見を交流する。 ・必要に応じて主題文を修正し（主題文②）たり、追加取材をしたりする。	・主題文②と主題文①の比較 ・感想記述
5	・はじめ・なか・おわりを考慮して組立表にメモし、随筆を書く。	
6	・推敲する。	
7	・表現の仕方をよりよくするために助言し合う。	
8	・読む観点に沿って交流する。	

5 考察

(1) 複数の随筆を読む

ア 変容

図1は、1編だけ読んだ時点と3編を読んだ時点での随筆を書くことに対する意識調査の結果である。1編の随筆を読んだ後よりも3編の随筆を読んだ後の方が、書くことへの抵抗感が薄らいでいることが分かる。また、感想を見ると、「随筆に共通していることを見つけられた」「日常の出来事を使って書いていることがわかった」のように、伝えたい思いとその根拠となる事実が含まれているこ

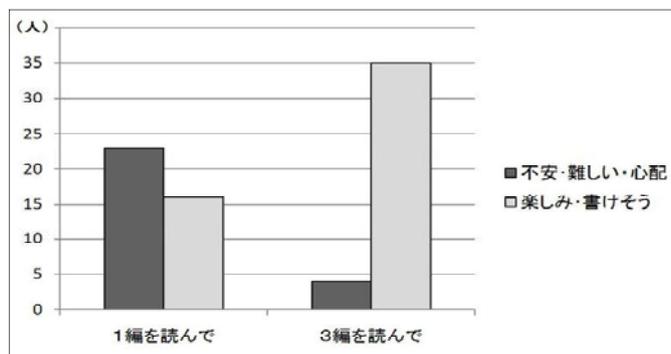


図1 随筆を1編読んだ時点と3編読んだ時点での随筆を書くことに関する意識調査の結果

ことから、兄妹や家族は、ケンカをしても自然に仲なおりができるのだと考えた」という具体的なものになった。

ウェブ図をかいた時点ではまだ漠然としていた思いが、主題文を書くことで明確になり、思いを自分の言葉で表現できるようになってきたといえる。

(4) ウェブ図を基に主題文について交流する

ア 変容

ウェブ図を基に、4人グループで主題文についての交流をした。改善点を具体的に指摘し合うことによって、事実と伝えたいことが変容した児童が36名いた。変容の種類は次のとおりである（複数回答）。

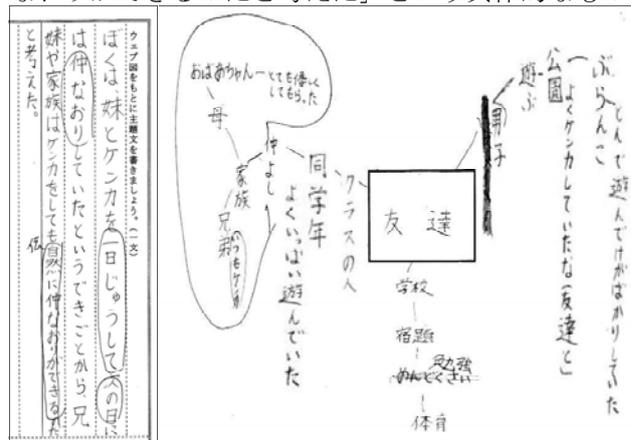


図4 C児の主題文①とウェブ図

○基になる事実が変容した

- ・言葉を補足して詳しくしたり、書く事例を増やしたりしたもの（17人）
例「バドミントンの練習でみんなに支えられて」
→「バドミントンの練習でみんなに支えられて、そしてコーチに厳しくされたことから」
- ・伝えたいこととのつながりや思いの強さを考えて、別の事実にかえた（7人）
例「コーチが教えてくれた」→「休まずに練習して、キャプテンになった」

○伝えたい思いが変容した

- ・以前の主題文より詳しく思いを表現したり、強い考えになったりしたもの（10人）
例「あきらめないことが大切」→「あきらめない心が自分に大切」
- ・交流の中で伝えたいことが別のものになったもの（8人）
例「どうして友達はあるのだろう」→「自分は友達に支えられて生きている」

主題文の交流をすることで、児童は、頭の中だけで考えてきたことの一部を実際に文章に書き表して紹介し合った。交流後の児童の感想には、「交流で友達の意見をもらい、主題文が充実したものになった。ウェブ図と交流で随筆が書けそうになってきた」「アドバイスが役立った。細かいところはけずって、伝えたいことをはっきりさせて主題文を書けた」「交流で、自分で分かっている他の人が分からないといけなと思った」というものがあった。

事実と伝えたいこととのつながりの強さ、言葉の過不足について具体的にアドバイスし合うことで、読む人に自分の考えが伝わるのかという不安感がなくなってきた。また、交流の後、アドバイスを基に主題文を見直すことにより、伝えたい思いをはっきりさせて随筆を書くことができた。

イ 抽出児童の様子

D児は書くことが全般的に苦手な児童である。初めは「野球を練習して、いい思い出を作った」という主題文であった。交流の際、友達に「たくさんの思い出を具体的に書けばいいのではないか」と言われ、「好きなこともたくさん思ったこともキャッチャーのこと」と発言し、ウェブ図にかき足していった。そして、「キャッチャーでアウトにした出来事から、それからもアウトにしたいと考えた」という主題文になった。ウェブ図を見直す場面では、「主題文を書き直せばいいのではないか」というアドバイスを受け、「キャッチャーで走塁をアウトにした出来事から、たくさん練習してそれからもアウトにしたいと考えた」に変え、わき目もふらずに書き直した後、満足げにうなずいていた。

授業後の感想にD児は「最初は変な主題文だったけれど、友達からアドバイスをもらって、いい主題文になった。たくさん書いてうれしかった」と記している。交流によるアドバイスがウェブ図や主題文の見直しに反映されていたといえる。

(5) 伝えたい思いを見つけて書く意識、苦手意識の変容

図5～図7から、文章を書くことに苦手意識を感じる児童が減ったことが分かる。「文章を書く学習のどんなところが好きか」という質問に対しては、「気持ちを書ける」と答えた児童が増えている。事前調査では、苦手と感じる理由として「言葉が思い付かない」という回答が多かったが、出来事や伝えたい思いを見つかったり、主題文を書いたりする活動を通して、児童は文章を書くことに対する苦手意識が弱まったのではないかと考える。

そして、5人の児童が「他の人の文章を読める」「思いを伝えることができる」と感想を書いているところから、伝えたいことを文章で表現し、互いの思いを文章を通して交流することに対する意欲が見られてきたことが分かる。

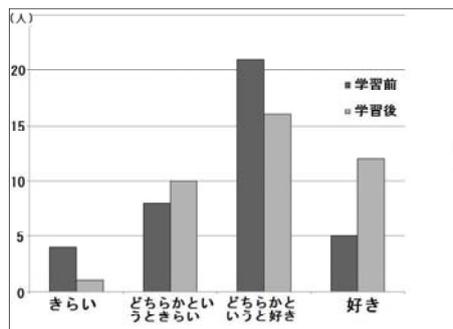


図5 文章を書く意識調査

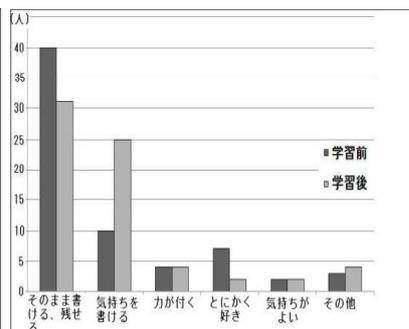


図6 文章を書く学習の好きなどころ

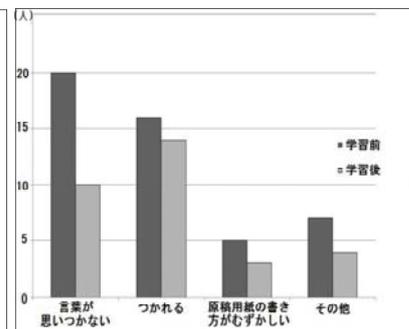


図7 文章を書く学習の嫌いなどころ

V 研究のまとめ

- ・3編の随筆を読んだ後では、1編のときと比べて、随筆について抱いていた不安や抵抗感が弱まり、題材を見つける手掛かりを得て、書く意欲を高めることができた。
- ・一つの事象について事実や伝えたいことなどの面からウェブ図を作成させることで、ほぼすべての児童が題材を見つけることができた。これは個々の言葉が次第に関連付けられ、伝えたい思いが明確になっていったことによるものと考えられる。
- ・ウェブ図に記した出来事や思いに言葉を補足しながら主題文を書いていた。ウェブ図に書いた段階では漠然としていた思いを、主題文を考えることで明確にさせることができたと考えられる。
- ・児童は交流後、主題文をより具体的にしたり、取材の補足をしたりするようになった。これは、主題文についてお互いにアドバイスし合うことで、より自分の思いが明確になったり読み手に納得してもらおうという意識が生じたりしたためと考えられる。

VI 本研究における課題

- ・児童がものの見方や考え方を広げ、自分の表現に生かせるよう、多様な筆者の考えに触れる機会が重要であるとする。そのため、「書くこと」と「読むこと」の指導の関連を図る必要がある。
- ・児童が見たり、経験したりしたときに抱いた思いは、音声言語や文字言語として表現しない限り、消えてしまう。日常生活で得たせつかくの思いや考えを、機を逃さず文章に書き表すことができるよう、書く活動を日常の指導に位置付ける必要がある。

<引用文献>

文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 国語編 (平成20年6月)』, p. 85

<参考文献>

- 大熊徹 2008 「思考力、判断力等等認識諸能力こそ書く学習における基礎・基本」『月刊国語教育7月号 (通巻 435号)』 日本国語教育学会編
- 菅原稔 2010 「「読むこと」から「書くこと」への可能性を見すえた国語教育」『月刊国語教育7月号 (通巻 459号)』 日本国語教育学会編
- 野口芳宏 2005 『鍛える国語教室シリーズ13 「作文力をのばす、鍛える」』 明治図書
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 国語編 (平成20年7月)』

<参考URL>

親子の日エッセイコンテスト 2007 入賞作品

<http://www.oyako.org/jp/archive/essay2007.html#essay5> (2011.1.6)